

『風葬の教室』に関する一考察

—山田詠美の求める人間像をめぐって—

洪 珍 熙*

(e-mail : jhh@kgu.ac.kr)

< 목 차 >

- | | |
|------------------|--------------|
| 1.はじめに | |
| 2. 教室における集団主義と個人 | 4. 人間としてのモラル |
| 3. 真の大人と責任 | 5. おわりに |
| 3.1. 子供と真の大人 | |
| 3.2. 杏における責任 | |

Key Words : 青春小説(youth novel)、集団主義(collectivism)、自我(personal identity)、真の大人(true adult)、責任(responsibility)、モラル(moral)

1.はじめに

山田詠美(1959～)は現代日本文学を代表する文学者の一人であり、作家になる前には双葉という本名でエロ漫画家として活躍した、多少独特な経歴の持ち主である。1) 山田は、芥川文学賞の候補にもなった『ベッドタイムアイズ』(1985)で文芸賞(河出書房新社)を受賞し、文壇にデビューする。『ベッドタイムアイズ』は彼女が実際交際していた黒人男性をモデルとした作品で、日本人女性と黒人男性との性愛を大胆な筆致で描いたことで話題になった。これに対して佐伯順子は「『ベッドタイムアイズ』は山田詠美の出世作であり、明治時代の〈神聖な恋愛〉であるプラトニッククラブと男性中心の〈処女〉幻想をふちこわす」と指摘した。2) このように文学史における画期的な「恋愛

* 京畿大学校、副教授、日本近現代文学

1) 山田は明治大学日本文学科に在学していたが、大学を中退し、クラブなどでバイトをしながら漫画作品を発表した。実際出版された作品としては『シュガー・バー』(1981)、『ミス・ドール』(1986)、『ヨコスカフリーキー』(1986)がある。

小説」で名を挙げた山田であるが、彼女は恋愛小説以外に、いわゆる「青春小説」³⁾の作家としても知られている。

一般的に山田詠美の小説は二つの系統に分かれると言われるが、一つは男女の恋を中心に描いた恋愛小説と、もう一つは思春期を迎えた10代の日常生活を描いた青春小説である。例えば、デビュー作である『ベッドタイムアイズ』をはじめ『ソウルミュージック・ラバーズ・オンリー』(1987)、『アニマル・ロジック』(1996)は前者に当たり、『風葬の教室』(1988)や『放課後の音符』(1989)、『晩年の子供』(1991)、『ぼくは勉強ができない』(1993)などはその後者に当たる作品である。特に後者の作品は綿矢りさ(1984～)や金原ひとみ(1983～)などの後進の女性作家たちに影響を与えた。⁴⁾

本研究で扱う『風葬の教室』は、1989年、第17回平林たい子文学賞を受賞した作品であり、上述したように青春小説に属する。また、題目からも垣間見られるように「教室(=学校)」という空間を主な背景にしていることが特徴である。現代日本文学において学校を中心に描かれた小説は幾つかあるが、山田詠美のように学校における学生たちの「日常生活」を描き続けてきたケースはなかなか見当たらない。⁵⁾

「風葬の教室」に関する主な先行研究としては、教室における集団主義を日本社会の天皇制に例えて解釈した田中実の「フェティシズムの誕生—『風葬の教室』」⁶⁾と、作品に表れた生と死の

- 2) 佐伯順子(2006)「日本文学における近代の恋愛-明治から現代へ」、『日本近代文学-研究と批評』Vol. 5、韓国日本近代文学会、p.24.
- 3) 青春小説とは、思春期を迎えた少年少女たちを主人公とした文学作品で、「恋愛小説」や「冒険小説」のような、小説における下位概念である。代表的な日本作品としては夏目漱石の『三四郎』、三島由紀夫の『潮騒』、村上春樹の『ノルウェイの森』などが挙げられる。(ウィキペディア「青春小説」参照、<https://ja.wikipedia.org/wiki/>、検索日: 2017.8.20) 一般的に青春小説は青春期における人々の成長を描いた幅広い作品を指していると言えるが、山田詠美は小学校から高校に至る十代の青少年たちを対象に青春小説を書いてきた。
- 4) 2003年の下半期、『蹴りたい背中』と『蛇にピアス』で芥川賞を同時受賞した綿矢と金原は文芸春秋とのインタビューで、二人とも山田詠美の小説に影響を受けたと述べた。最年少受賞者であった綿矢は、好きな作品として山田詠美の『色彩の息子』や『蝶々の纏足』、『風葬の教室』を言及した。(2004「受賞者インタビュー 太宰治を片端から読みながら」、『文芸春秋』82巻4号、文芸春秋、p.328.)一方、金原は、山田詠美の『放課後の音符』や村上竜の『69 sixty nine』を夢中になって読み、それが小説を書き止める切っ掛けになったと述べた。(2004「受賞者インタビュー 不登校とパチロスの日々には父は」、『文芸春秋』82巻4号、文芸春秋、p.321.)このような二人の発言を通して、山田詠美の作品、中でも青春小説が後進の女性作家たちにとっていかに多大な影響を及ぼしていたのか推測できる。
- 5) 学校を舞台にした現代小説と言えば「学園もの」を除くと、女子高校に起きた殺人事件を中心に書かれた東野圭吾の『放課後』(1985)や女子高生のタイムスリップを素材にした北村薫の『スキップ』(1995)、殺し合いを強いられた中学生たちを描いた『バトルロワイアル』(Battle Royale, 2000)などを挙げられる。しかし、これらの作品は教室で行われる学生たちの日常生活を描いたとは言えない。
- 6) 田中実(1991)『国文学解釈と鑑賞』(56巻8号)、至文堂、pp.173-182.

対照的なイメージについて検討した増田正子の「『風葬の教室』を読む—少女『杏』の死と再生の物語」⁷⁾を挙げられる。また、韓国では、いじめを解決して行く主人公の内的成長に注目したイム・ジシュクの「山田詠美の『風葬の教室』研究—杏の成長を中心に」(祥明大学校修士論文、2011)が見られる。

本研究ではこのような先行研究を参考にしながら、主人公である10代の少女「杏」の教室における立場や心境を中心に、山田詠美が『風葬の教室』を通して求めていた「人間像」について考察したい。このような考察を通して、先行研究では言及されなかった、作者山田の青春小説が持つ意義が分かると思われる。テキストとしては『蝶々の纏足・風葬の教室』(新潮社、1997)を使うことにする。

2. 教室における集団主義と個人

『風葬の教室』は、小学校五年生である「本宮杏」という女の子を主人公とする作品で、一人称の視点⁸⁾で語られている。杏は東京出身であるが、父親の仕事によって地方の学校を転々とする生活に慣れていて、しかし、新しく転校したある地方の学校で彼女は、クラスメートたちにいじめられ、暴力まで受ける。それで自殺に追い詰められるが、ある切っ掛けを通して、自分を苦しめていた子供たちを心の中で殺し、風葬させるという話である。

主人公の杏は、人それぞれの個性を認める家庭の雰囲気と、転校を繰り返す生活の中で、段々強い自意識を持つ女の子として育ってきたと見られる。次の引用文にはそのような彼女の自意識が具体的に記されている。

私が新しい学校生活に出会うのは、いつも春ではありません。学年の始まる春は、誰もが私と同じ立場なので、私には少しも新しい気持が起きません。私は、自分を特別だと感じません。特別でない自分を、いったい人はいつくしむことが出来るのでしょうか。

さいわいにして、私の父は転勤の非常に多い仕事に就いていたので、私は自分が他の大勢の子供たちと違うことを早くから知りました。自分と他人との区別をあっさりつけてしまうことを学んだのです。

(pp.99-100)

7) 増田正子(1995)『日本文学』(44巻6号)、日本文学協会、pp.47-56.

8) 一人称の視点ではあるが、主人公の小学校五年生の少女と語り手の間にはギャップが見られる。作品には、山田詠美の子供時代の体験が素材として使われており、学校という社会的な共同体や教師に対する作者の問題意識、即ち大人の視線が感じられる。

杏が新しい学校に移るのは夏の終り頃で、普通の子供たちとは違う時点で学校生活を始めなければならなかった。一学期が終り、大体の子供たちが教室での生活に慣れている時に、いわゆる異邦人として登場し、彼らと共に生活しなければならなかったのである。そして、引用文から見られるように、杏は自分と他人との関係を「特別」「区別」「違う」という言葉で表現することで、自分の自意識を明らかに示している。杏は新しい学校で「水のような人生」、即ち、円満な人間関係を希望しながらも、あるかままの自分を持ち続けようとしていた。そして、このような自我に対する認識は、彼女の表現を借りれば、人間における「芯」として説明される。

何度も引っ越しをくり返していたために、私は場所というものに、何のこだわりも持たなくなっていました。生活の中の楽しみはすべて自分が形作っていくのだということを、もう私は知っていました。普通、人間は変わっていくものだと思われて、私の読んだ本にも、そのようなことが書かれていますが、私は、一番、変わらないのが人間の芯だと思っていたので、母や姉が、あそこの土地は良かった、などと話しているのを聞くと不思議な気持ちになりました。生まれってしまった人間は、もう変えられないものを体の芯に持っていると悟った私は、土地が変わると、カメレオンのように肌の色は変化するけれども、結局は同じなのだと信じていました。私は無駄な抵抗をとうにあきらめて、どこに行っても、私自身であることを変えないようにしようと決心していました。(pp.103-104、下線筆者)

引用文で見られるように、杏は「生活の中の楽しみはすべて自分が形作っていく」ものだと思う主体的な少女である。彼女は、カメレオンが外部からの影響、即ち、温度や光のせいでその肌の色が変わっても本質はそのままであることと同じく、環境が人の人生に一部影響を与えることはあっても、中心である「芯」まで変えることは出来ないと信じていた。しかし、自我に対する杏の強い認識は、クラスの子供たちに違和感をもたらせる。

最初、杏の身なりや独特な言い方は、クラスで好奇心の対象になったが、彼女が女の子たちの憧れであった体育教師に可愛がられるようになったのを基点にして、ますますクラスメートたちとの間で距離が広がる。特に、杏は可愛いリボンや花柄のショーツを身につけていたことで女の子たちの注目を集めたが、彼女のショーツはもうこれ以上憧憬ではなく、憎しみの異物、ついには「男たらし」の証拠となり、とうとう杏は学校生活に孤独や絶望を感じるようになる。

私の可愛いショーツがいくら勝っていると言ったって、私以外の全員が木綿のでっかいパンツをはいていたら、私は負けたのと同じことなのです。小学生の世界に絶対的な価値など存在しないのです。(p.128)

「小学生の世界に絶対的な価値など存在しない」という表現から推測できるように、学校という共同体は、相対的な視点によって動かされ、構成員の持つそれぞれの個性が認められない傾向がある。そういう環境の中で、自分の芯を持ちつづけようとする杏の存在は、同質化を求める五年三組の共同体にとって「おでき」のように扱われた。中でも、教室における集団主義を率いる人物としてクラス委員の恵美子が存在しており、杏とは対照的な人物として描かれている。杏は恵美子について次のように語る。

恵美子は、自分を主張することがとても上手な子でした。私とは正反対の姿勢をいつも崩しませんでした。おまけに、とても成績がいい。いつも、クラスのお友だちの気持を引きつけて離さない子でした。私に、最初に親切してくれたのも彼女です。転校生に親切にするという、誰も逆らうことの出来ない美徳を恥かしげもなくやってのけるような子でした。(pp.118-119)

杏から見た恵美子は、クラス委員という役割に相応しく、成績優秀で自己主張の強い人であり、何よりも「クラスのお友だちの気持を引きつけて離さない子」であった。そして、そのような恵美子の素質は、ある出来事を通して明確に表れる。

ある日、クラスメートのお母さんが亡くなったという話を担任先生から聞かされた時、恵美子は急に「犬の泣き声のような声」で泣きじゃくる。最初はあつけにとられていたクラスの子供たちも、彼女に従って一人ずつ泣き始め、教室はすぐさま「泣き声の嵐」になってしまったのである。そして、杏は、このような恵美子の態度から、かつて葬式で泣くことを仕事として持っていた「泣き女」を思い浮かべる。結局、恵美子は、泣く行為を通して子供たちの感情を動かし、それを一つの方向へと導く役割を果たしていた。そして、ここで見逃してはいけないのは、恵美子を除いた他の子供たちの涙に、自分の意志など入っていないことである。このように集団の感情を一つの方向に向かわせようとする恵美子と自分の芯を守りつづけようとする杏の態度は、小説の中で対比されている。そして、二人の対照的な様子はその名前からも見受けられる。

増田正子は主人公の「杏」が高校生の読者によって「アン(An)」として理解されていたことを指摘しながら、『風葬の教室』が「高校生にとってはまさに、「青春期の唯一、かけがえのない存在(an)の物語であるかもしれない」と述べた。⁹⁾「杏(アン)」という名前が「An」もしくは「Anne」に基づいて作られたのかどうか明らかではないが、実際、山田詠美は作品の中で英語まじりの表現を頻繁に使い、登場人物たちに横文字のニックネームをつけることが多い。例えばデビュー作である『ベッドタイムアイズ』では「スプーン(spoon)」というニックネームを持つ黒人男性をはじめ、「キ

9) 前掲書、増田正子(1995)、p.56.

ム(Kimberlyの愛称と思われる)や「マリア姉さん」と呼ばれる日本人の女性たちが登場しているが、それぞれの名前は象徴性を持っている。特に「スプーン」という名前は「銀の匙をくわえて生まれてくる(be born with a silver spoon in his mouth)」という西洋の諺に基づいたものであり、貧しくて孤独な人生を生きる黒人男性「スプーン」の姿とは対照的な逆説の意味を持つ。¹⁰⁾

一方、漢方では杏の芯を乾燥した杏仁が薬剤として使われている。前述したように主人公の杏は「人間の芯」を重んじる少女であったが、「杏の芯」が薬として効果があるという話は意味深い内容であろう。杏とは対照的に「恵美子」は、1947年から1951年にかけてランキング10位に入った人気な名前であった。¹¹⁾ 作者山田はごく一般的な名前の恵美子と、多少変わった名前の杏との対比を通して、二人の対照的な態度を浮彫りにしようとしたと見られる。即ち、五年三組という共同体の集団主義を象徴する恵美子と、個人に基づく自由な思考や意志を重んじていた杏との相違を通して、個人における自我の覚醒について話したかったと考えられる。

3. 真の大人としての責任

3-1. 子供と真の大人

教室における非理性的な集団行為に対して、杏は居心地の悪さを感じると同時に、一種の「恐怖感」を覚えるようになる。そして、その宗教的な雰囲気の中で自分が犠牲になることを直感する。

私は自分が生け贄になりつつあるのを感じています。これこそ、私が危惧していたことなのです。水のような人生。私はそれだけを望んでいたのに。教室には、いつもある種の宗教がはびこる。私は何度もくり返してきた転校の中で、それを実感していました。私は不良になれる姉の年齢を、羨しく思います。私は歯がゆい思いをして、学校に通わなくてはならないでしょう。登校拒否をするには、私の家族は大人でありすぎるのですから。(pp.129-130、下線筆者)

引用文から見られるように、杏は教室における集団主義の雰囲気を一つの宗教として捉えながら、自分がその宗教の生け贄になることを恐れていた。彼女はクラスの中で平和な日々を送りたいと願っていたが、それは自分の思い通りにはならなかった。自分の芯を守ろうとする杏をクラスメートたちは排除

10) 洪珍熙(2013)「山田詠美の『ベッドタイムアイズ』における黒人男性のイメージとその意味」、『日本文学研究』第40輯、増国大校 日本研究所、pp.179-184。

11) 「みんなの名前辞典」(<https://mnamae.jp>、検索日：2017.8.20.)

し、いじめ、追い詰める。結局、自分の日常生活において欠かせない学校で杏は居場所を無くしてしまい、「登校拒否」や自殺までを考える。しかし、このような切羽詰まった状況の中で、教室における唯一の大人である担任教師は杏の力になってくれない。

私は、何事もなかったように普通の顔をしていました。それが、皆に、まだまだやれるというような目安になってしまったようです。本当は、皮膚一枚を剥がされれば、泣き声の塊である私のことなど、誰も気がつかなかったのです。気がつくべきである先生方ですら。もっとも、私は、そんなごたいそうなものを子供である先生方に期待していませんでしたから、失望もしませんでした。 (pp.132-133、下線筆者)

引用文では、教師に対する杏の否定的な捉え方が十分伝わるが、この前兆は作品の最初から垣間見られる。杏が転校してきた日、担任教師は紹介のため黒板に彼女の名前を書いた。その時、杏は「きしきしと音がして、私の名前は、もう既に、先生の白墨に踏みにじられた」と述べたが、このような感想を通して教師に対する杏の感情や決して円満ではない関係が予測される。そして、教師に対する不信は、クラスメートたちによるいじめがエスカレートされることに従って、益々明らかになる。

上述した二つの引用文を見ると、「私の家族は大人でありすぎる」とか「子供である先生」という表現があり、主人公の杏—あるいは、作者—は人を大人や子供に分けて区別しているのが分かる。実際、作品の中で杏は「私は人間には大人と子供という分け方があるのだといつも思います。それは、もちろん実際に年齢をとっているかどうかということとは関係がありません」と述べている。そして、教室における唯一の大人である教師が実は子供であり、自分は今まで真の大人である先生に会ったことがないと指摘した。このような指摘は、通念上、子供を教育し、社会へ導く重要な役割をしているという教師の権威に対する挑戦だとも見られる。

すると、杏—あるいは、作者山田詠美—の言う子供や真の大人とは何を意味しているのか。杏は周りの人物たちを子供と大人に区別していたが、例えば、相手に対する好感を隠さず露にする体育教師を子供に、自分の感情を過度に示さず行動するクラスメートの「アッコ(=あつひこ)」を大人だと判断していた。それから、作品の中には、子供と大人を区別する重要な試金石として、「責任」が挙げられる。

ところが、この先生が、いけないことに、教室での私の立場を徐々に感じ取っていったのです。彼女の元に、子供の作る私への嫌悪の波が寄せていったのです。子供たちに迎合し

の方が楽であることを悟っている彼女はどうか。やはり、楽な道を選びました。つまり、事あるごとに私を叱り始めたのです。

その叱るというのは、もちろん、悪いことをした私をたしなめるためではありませんでした。私に小言を言うことを習慣化させようとする意図によるものでした。そして、それが本当に習慣になってしまった時、彼女は、私にも心があるということをすっかり忘れました。宮本さん。彼女が私の名前を呼ぶ時、私は両耳をつかまれて、高高と持ち上げられた可哀想なうさぎです。その後、彼女は、必ず私を否定する言葉を口にするのです。(pp.134-135)

担任教師はクラスの雰囲気を感じながらも、杏を助けてくれるどころか、子供たちの側に立つことで、彼女をより苦しめる。即ち、教師として、大人として行動をするのではなく、子供たちの集団に迎合することで、自分の責任から逃れようとしたのである。正当な理由なしで先生に叱られる杏を、作者は「可哀想なうさぎ」に例えている。そして、次の章を通して改めて言及することになるが、このように人を動物に例えているのは、人間性を喪失した教室の世界を暗示する表現だと理解される。

クラスメートによるいじめがエスカレートする中、ある日、杏は教師の指示で黒板を消していたところ、黒板消を教壇の上に落としたことで「育ちの悪い子」だと叱られる。これは作者山田が自分のエッセイ「『良い先生』と『悪い先生』」¹²⁾で示しているように、彼女が小学校二年生の時に実際経験したエピソードでもある。杏は教師の言葉が自分だけではなく自分の家族に対する否定だと思い、その反感を顔に表すが、その結果、彼女は黒板消でこづかれることになる。この事件を基点で、恵美子を初めとするクラスメートたちは、杏を「育ちの悪い子」だと呼び続けるようになり、いじめは益々激しくなる。そのうち杏は、クラスの女の子たちから「死んじまえ」という罵声や物理的な暴力まで受け、ついに自殺に追い詰められる。

山田詠美は、自分の子供時代の経験を小説に取り入れながら、教室における教師の役割や権威について疑問を投げている。過去に比べて教育現場の雰囲気が変わったとは言え、教師は教室における唯一の大人であり、学生たちに対する教師の影響力を見逃すことは出来ないと考えられる。しかし、前述したように山田は、人が子供か大人かは年齢で決まるものではないことを前提にしながら、子供と大人の境界を「責任」の有無から捉えようとした。

一方、田中実は「フェティシズムの誕生—『風葬の教室』」の中で、「『風葬の教室』の刺は教育の現場に突き刺さっているのではないか。これが論じられていることを聞かないが、とりわけ国語教育界はこれをどう受け止めているのかが気になる」¹³⁾と述べた。これに答える形で、現役教師であ

12) 山田詠美(1988)『私は変温動物』、講談社、pp.25-26.

13) 前掲書、田中実(1991)、p.173.

る深谷純一は田中の発言に「刺激」され、高校で『風葬の教室』をテキストとして使っていたことを明らかにした。¹⁴⁾ また、同じく現役教師である白瀬浩司も、高校生たちに『風葬の教室』を読ませ、生徒たちの作文を実践資料として纏めていた。¹⁵⁾ このように、現役教師たちが教育現場の現状に問題意識を持ち、真姿に捉えようとしたその試みは、『風葬の教室』が与えた一つの成果ではないかと思われる。

3-2. 杏における責任

すると、作品の中で主人公の杏は、自分における責任をどのような形で実現していたのだろうか。クラスメートたちのいじめに耐えられなくなった杏は、遺書を書き、自殺を図ろうと決心するが、次の引用文には、そのような彼女の心境が記されている。

本当は、私だって、こんなに短い一生を終えるのは嫌なのです。だけど、仕様がなない。私は、あの教室のために死ぬのです。あの人たちの宗教を否定するために命を絶つのです。あの子たちは、私を否定した。私に死刑囚人の真似事までさせて辱めた。だから、私は彼らに一生かかっても拭いさる事の出来ない恥を残したいのです。もしかしたら、馬鹿げていると思われるかもしれません。死ぬ気になれば何だって出来るという人もいるかもしれません。でも、私の目の前に、死ぬ気になって出来ることなど何ひとつないのです。死んでしまった方がやりとげられることだってあるのです。(p.164、下線筆者)

いじめに遭った被害者の中には、苦しんだ挙げ句の末、自殺に追い詰められる場合が少なくない。下線部で見られるように、第三者は「死ぬ気になれば何だって出来る」と言いがちである。しかし、杏の独白からも分かるように、窮地に立たされた被害者たちは死ぬ気になって出来ることが一つもないと思い、自分の無実を訴えるために、または、加害者に処罰を与えるために、自殺という極端な決断を下すことがある。幸いにも杏は自殺を止めるが、彼女を自殺から救ったのは、愛する家族に対する「責任」からであった。

私はベッドに腰かけて、しばらく呆然としていました。これじゃあ、死ねない。私はつぶやきました。私は、自分が死ぬことによって、何人の人間が日常生活を送れなくなるのかを数えてみました。父、

14) 深谷純一(1993)「『風葬の教室』(山田詠美)を授業で読む」、『日本文学』(42巻4号)、日本文学協会、p.66.

15) 白瀬浩司(1994)「山田詠美『風葬の教室』(高三・現代文)の授業(国語教育部門、第十四回 研究発表大会・発表要旨)」、『日本文学』(43巻6号)、日本文学協会、p.93.

母、姉、それに杏をとりわけ可愛がっている父の実家のおばあちゃん。杏のベッドにもぐり込もうとする猫のジジ。

正直に言って、私は自分が死ぬことなど少しも恐くない。けれども、後に残された人々のことを考えると恐怖で体が震えます。私は、その時、生まれて初めて責任という言葉を嘸み締めました。私は自らの手で自分を消してしまおうと決意した時に、責任という足枷の存在に気づいてしまったのです。
(pp.168-169、下線筆者)

杏は首吊り自殺をするため紐を探していたところ、母親と姉が自分のことを心配しながら、母親自慢のシュークリームを焼く計画を立てていることを聞く。その後彼女は、自殺という行為が家族や愛する人たちの日常生活を壊し、彼らを限りない悲嘆に陥れる無責任な行為であることに気づく。

前述したように、作者の山田詠美は青春小説を通して青少年の成長を描いてきたが、小説の中で常に彼女は「責任」の問題を示していることが分かる。例えば、山田のもう一つの青春小説である『放課後の音符』は女子高生たちの恋や友情を描いた作品であるが、そこには、他の女子にボーイフレンドをとられた友だちのために、ボーイフレンドをとった女(ヒミコ)に集団で抗議にいっく少女たちが登場する。語り手の私は、実際は抗議などしたくなかったが、じゃんけんに負けただけで、否応なく代表として抗議に行く立場に置かれる。

「それで、いったいなんなのよ」

ヒミコは苛々した様子で、私を見詰めている。私は、どうしていいのかわからない。そうしている間に、どんどん日は暮れて行く。夕陽が、彼女の横顔に当って、綺麗だ。この人、違う。私は、そう思った。何が、どう違うのかわかって言われると困るけれど、でも、他の女の子たちとは違うのだ。彼女は、とても、ひとりなのだ。片方の頬に夕陽が当たると、ちゃんと、もう片方の頬には影が出来る、そんな女の人ののだ。ふわふわと漂う私たちには影がない。そんなものは、どこかに消えてしまうくらいに無責任な輪郭を持っている。
(『放課後の音符』 pp.145-146、傍点原文、下線筆者)

引用文では、人間の行うある行為を「陽」に、その行為に当たる責任を「影」に例えている。即ち、陽が差されると当然、影が生じることと同じように、人間の行為には必ず責任がつくべきであると比喩的に語られている。そして、自分の行動に対して責任を持つ堂々とした一人(ヒミコ)が、集団で行動しながら誰一人責任を持とうとしない無責任な複数(私たち)に比べ、どれ程素晴らしい人間なのか語り手の視線を通して描かれている。

既に言及したように、作者山田は『風葬の教室』においても同じく、人間における責任の問題について触れている。即ち、「真の大人」とは「無責任な子供たち」と違って、一人で主体的に行動しながら自分の行動に責任を持つ存在であることを述べているのだ。16)

4. 人間としてのモラル

クラスメートたちによるいじめで自殺を考えていた杏は、愛する家族に対する責任のため学校生活を続けることになるが、いじめは止まることなく、彼女は益々生気を失っていく。そのような杏にとって生気を取り戻す切っ掛けを作ってくれたのが、ある男性教師と彼女の姉である。担任の代りに理科の授業を担当するようになった男の先生は、蚊に刺された時、それを退治する自分だけの方法について語る。それは蚊が気持よくなるまで血を吸わせた後、腹いっぱいになって思い通りに飛べなくなった時、一気に叩きつぶすというやり方であった。この話を聞いた杏は次のように考える。

私は身動きすら出来ずに、先生を凝視していました。私は、昨夜の姉の言葉を反芻しながら、先生の言ったことと重ね合わせていました。全然平気だったわ。いじめっ子をひとりひとり殺していったもの。私の頭は、がんがんと鳴り響けていました。心の中に立ち込めていた霧が急速に晴れてゆくの感じます。何故、こんなことに気づかなかったのでしょうか。昨夜の私は、余程、動盪していたと見えます。何も自分が死ぬことはないではありませんか。もう一度、姉の言葉が甦ります。まさか、本当に殺さないわよ。自分の心の中で殺していったのよ。(pp.172-173)

杏は愛する家族に対する責任を感じ、自殺を止めたが、望んだ通りの日常生活を営むことは出来なかった。そのような彼女が生きる力を回復したのは、姉が言ったように心の中でいじめっ子たちを殺すこと、言い換えれば彼らを「軽蔑」することだった。

私の生み出した人の殺し方は、軽蔑という二文字だったのです。人を殺すというのは適切でない言い方かもしれません。男の人の靴に欲望を覚える私が人間なら、私は彼女たちを自分と同位置にな

16) 田中実「『風葬の教室』の五年三組の共同体のメンバーは、どこにも責任の〈主体〉を持ちえないが故に一種の殺人集団となり、この動向は国際社会の中の日本の姿と重なって来るように思える」と言いながら、『風葬の教室』の五年三組が日本という国家共同体の縮小版であることや教室における「天皇制」の問題を指摘した。(前掲書、田中実(1991)、p.173.)

んて、置きたくありません。私は、自分たちを人間だと思っている愚かな者たちを、まず動物にまでおとしめ、そしてから、じわじわと殺して行くのです。(p.176)

杏は軽蔑するという方法を通して、いじめっ子たちを「動物にまでおとしめ」る。引用文では、「人間」である私と「動物」であるいじめっ子たちとの対照が見られるが、このように人間を動物あるいは、獣一に例える表現は、実際、作品の最初から示されている。『風葬の教室』は「鳥獣戯画」という素敵な絵を社会科の教科書で見たことがあります」という意味深い文章で始まる。鳥獣戯画とは、正式には「鳥獣人物戯画」と呼ばれる甲乙丙丁4巻の絵巻物で、中でも甲巻は擬人化されたうさぎや猿、蛙の動物たちが登場され、人間社会を戯画的に描いた絵として有名である。¹⁷⁾ 作者山田が初頭に鳥獣人物戯画の話を入れたのは、これから五年三組の教室で展開される、人間性を喪失した獣のような世界を暗示しようとしたと推測される。

それから、軽蔑の念を抱いた杏は「欲望」という感情を通して、人間性の回復を試みていることが分かる。杏は、自分が好感を持っていたクラスメート「アッコ」の上履きが汚れているのを見て、それを洗ってあげたい欲望に駆られる。軽蔑とともに、好きな男の持ち物に触れたいという欲望によって、杏は生きていくための力を取り戻し、一人の人間としての自我に目覚めるのであった。

特に、アッコの上履きをめぐるこの場面は、増田正子も指摘したように、杏の「少女期からの脱皮を示す」¹⁸⁾ 象徴的な部分だとも理解される。杏は五年三組に転校してきた最初の日、お客さん用のスリッパを履かされていたが、「スリッパの中のばい菌」を恐がるほど敏感な感覚を持った少女であった。そのような彼女が、自ら、汚れている上履きを手にしたいと思うほど心的変化を見せるシーンは、少女から一人の女性への成長を表す象徴的な内容だと見受けられる。

一方、田中実は、杏がアッコの上履きに覚える欲望をフェティシズムに基づいて、次のように解釈している。

欲望を目立たせるためには、お茶を飲みたいとか、御飯を食べたいとか、暑いとか眠りたいとかという他と共有できる欲望を持つのではなく、これだと共同体の中に組み込まれ、他から侵入されるが、そうした他と共有可能なものではなく、杏固有の欲望を獲得することが必要である。連綿と欲望の流動する共同体の構造を切断する(殺す)ためには、弱者が強者に成り変わるレベルでなく、共同体の模倣する欲望領域そのものから脱出することである。そのためには大好きなアッコへの欲望でない(も

17) 「世界遺産栴尾山高山寺公式ホームページ」

<http://www.kosanji.com/chojujinbutsugiga.html>, 検索日: 2017.8.20.)

18) 前掲書、増田正子(1995)、p.50.

し、アッコへの欲望ならば、他と同様クラスの欲望体に絡み取られてしまう)、〈アッコの靴〉を対象とすることである。クラスの「空気」、その「宗教」を殺す具体的な力が、〈アッコの靴〉への欲望というフェティシズムであり、倒錯した欲望のかたちが彼女をまっとうな自立した一人の〈人間〉にする。〈人間〉らしい〈人間〉になるためのフェティシズムの誕生というパラドックスこそが、杏の欲望の自立、人間性の回復であった。これが「人間であること」を杏に実感させたのである。19)

杏は心の風葬という方法を通して、殺される者から殺す者へと変った。しかし、単なる弱者から強者への変換では、五年三組のパラダイムから抜け出すことは出来ない。そこで、引用文で田中が指摘したように「他と共有可能なものではなく、杏固有の欲望」を獲得することが必要であったと見られる。筆者もこのような田中の見解に同意するが、すると、杏が実感した「人間」、あるいは作者山田が求めていた人間性の回復とは何を意味しているのだろうか。

山田詠美は作品の中で、「人間が獣の瞳を持った時、そこには道徳も、常識も、感情すら存在しなくなることをどなただけの人が知っているでしょうか」と読み手に問いかける。このような問いかけは、集団主義に基づく五年三組の狂気には、人間が持つべき道徳や常識、感情は存在しなかったことを示す表現であろう。この獣としての五年三組に対して杏は、家族愛に基づく責任やモラルを中心に、自分の人間性を回復しようと試みたと見えよう。

山田詠美の青春小説には、高校生の飲酒や喫煙・セックスなどが普通に描かれていて、彼女の作品とモラルは不釣り合いだと見受けられるかも知れない。だが、破格の性愛が描かれた恋愛小説においても、彼女が求めていたのは「本物の恋」を求め続ける素直な心であったことを見逃してはいけない。20) そのような面を考えると、山田は自分の小説を通して、人間として生きて行くことの意味や人間性の回復を考えつづけてきた作家だと言えよう。

5. おわりに

現代日本文学は、特に1980年代に入ってから女性作家の文学活動が目立ち、女性が小説を通

19) 前掲書、田中実(1991)、p.177.

20) 山田詠美のデビュー作であり、男女の性愛を大胆に描いたことで知られている「ベッドタイムアイズ」について竹田青嗣は「ひどくナイーブなひとつの愛のかたち」が書かれた奇妙な小説だと評価した。(竹田青嗣(1986)「山田詠美論—至近の目」(新鋭作家論特集)『文芸』(25/5)河出書房新社、p.318.)また、浅田彰は「口先だけの道徳ではない、身体全体で生きられるモラル」の作品だと述べた。(浅田彰(1996)「解説—モラルの誕生」『ベッドタイムアイズ・指の戯れ・ジェシーの背骨』、新潮社、p.315.)

して自分の立場や視線から日常生活や恋愛を語るが多くなった。その中心には本研究で扱った山田詠美をはじめ、よしもとばなな、川上弘美、江国香織などの作家たちによる旺盛な活動があった。中でも山田詠美は、大胆な筆致で女性主導の恋愛小説を描いてきたことで、主体的な女性像を作り上げたと評価される。そして、そのような女性像は、少年少女を主な登場人物にする青春小説においても同じく見られる。

本研究で分析した『風葬の教室』は、クラスメートたちによる集団的ないじめに苦しんでいた一人の少女杏が、自分に訪れてきた苦難や自殺の誘惑を乗り越え、どのように成長したのかが主な内容である。中でも、今まで社会的なマイノリティとして扱われてきた女性、それも子供である女の子が、文学作品の中心を成す主体的な人物として描かれている点は注目すべきであろう。そして、作品の中には、次のような概念が対比されていることが分かる。

〈表1〉「五年三組」と杏の対照的な様相

| 五年三組 | 杏 |
|------|--------|
| 集団 | 個人 |
| 子供 | (真の)大人 |
| 無責任 | 責任 |
| 獣 | 人間 |
| 不道徳 | モラル |

上の表と今までの作品分析に基づくと、作者山田詠美が青春小説の『風葬の教室』を通して求めていた人間像は、次の三つに纏められると思われる。

まず、自我に目覚めた主体的な人である。主人公の杏は、五年三組の教室における集団主義に對抗しながら、自分の芯を守ろうとした。作品には、環境に惑わされず、自分の意志を貫いていく個人の姿が表れている。

二番目に、自分の行為に責任を持つ人である。作者山田は、人が子供か大人かは年齢によらないと指摘しながら、人が真の大人になる為には、現実から逃げられず、責任を果たすべきだと話している。

三番目に、人間としてのモラルを持つ人である。五年三組の子供たちは、自分たちの集団に従わない杏の存在をいじめ、否定することで、彼女を自殺に追い詰めた。その過程で見せられた彼らの行為は非常識・不道徳であり、正に獣の世界を想像させるものであった。このような残酷な状況の中で杏は、モラルを持つ真の人間になろうとした。

結局、山田詠美は『風葬の教室』という青春小説を通して、真の大人、あるいは、真の人間と

して成長することは何かという疑問を読み手に投げ掛けていると思われる。そして、彼女自身が出した答えは、責任とモラルを持つ主体的な人間像であった。

「1.はじめに」で言及したように、日本では、一部の学園もの—それもエンターテインメントの要素の強い—を除くと、学校における青少年の日常生活や彼らの悩みを描いた現代小説はそれ程多くない。このような現状の中で、教育現場や日本社会に対する問題意識を持って、青春小説を描きつづけている山田詠美の活躍には今後も注目したい。

一方、最近韓国でも、『ある日、私が死にました(어느 날 내가 죽었습니다)(2004)の李敬恵(イ・キョンヘ;1960~)をはじめ、『ワンドゥギ(완득이)』(2008)や『優雅な嘘(우아한 거짓말)』(2012)でその名を知られている金呂玲(キム・リョリョン;1971~)²¹⁾などの女性作家によって、青少年の悩みやアイデンティティーの問題を扱う小説が関心を集めている。今後、韓国と日本における青春小説の様相やそれぞれの相違を比較・考察するのも、文学研究において意義のある作業になれると考えられる。

【参考文献】

- 사에키 준코(2006)「일본문학에 있어서의 근대 연애-메이지에서 현대로-」
『일본근대문학-연구와 비평』(Vol.5), 한국일본근대문학회, 2006, pp.9-36
- 洪珍熙(2013)「山田詠美の『ベッドタイムアイズ』における黒人男性のイメージとその意味」, 『日本学研究』第40輯, 増国大校 日本研究所, 2013, pp.177-194
- 浅田彰(1996)「解説—モラリストの誕生」『ベッドタイムアイズ・指の戯れ・ジェシーの背骨』新潮社, pp.315-322
- 金原ひとみ(2004)「受賞のことは 受賞者インタビュー不登校とパチロスの日々に父は」『文芸春秋』(82巻4号), 文芸春秋, pp.320-324
- 川村たかし(2004)「続・児童文学の方法(16)青春小説《少女たちの恋》」『児童文芸』(50巻4号), 日本児童文芸協会, pp.8-11
- 柴田勝二(1997)「『日常』の成立—『ジェシーの背骨』(山田詠美)」(特集小説を読む、家族を考える—明治から平成まで家族/反家族の肖像)『国文学解釈と教材の研究』(42巻12号)学灯社, pp.107-111
- 白瀬浩司(1994)「山田詠美『風葬の教室』(高三・現代文)の授業(国語教育部門,第十四回研究発表大会・発表要旨)」『日本文学』(43巻6号), 日本文学協会, p.93
- 田中実(1991)「フェティシズムの誕生—『風葬の教室』」『国文学解釈と鑑賞』(56巻8号), 至文堂, pp.173-182
- 深谷純一(1993)「『風葬の教室』(山田詠美)を授業で読む」『日本文学』(42巻4号), 日本文学協会,

21) 金呂玲(キム・リョリョン)は児童文学(あるいは、青少年文学)を描き続けている代表的な作家である。中でも、障害者の父親とベトナム人の母親を持つ高校生の成長を素材にした『ワンドゥギ』や友人によるいじめによって自殺した少女とその家族の話を描いた『優雅な嘘』は映画化もされ、大衆的な注目を集めた。金は作品を通して、青少年の抱えている悩みや家族の意味を求めていると思われる。

pp.66-70

増田正子(1995) 「『風葬の教室』を読む一少女『杏』の死と再生の物語」 『日本文学』(44巻6号)、日本文学協会、pp.47-56

山田詠美(1995) 「Jay-Walk」 『放課後の音符』新潮社、pp.135-159

_____ (1996) 「ベッドタイムアイズ」 『ベッドタイムアイズ・指の戯れ・ジェシーの背骨』新潮社、pp.7-99

_____ (1996) 「あどがき」 『ぼくは勉強ができない』新潮社、pp.256-267

_____ (1997) 「風葬の教室」 『蝶々の纏足・風葬の教室』新潮社、pp.95-179

綿矢りさ(2004) 「受賞のことは 受賞者インタビュー太宰治を片端から読みながら」 『文芸春秋』(82巻4号)、文芸春秋、pp.325-329

| |
|--------------------------|
| 논문 투고 일자 : 2017. 08. 31. |
| 논문 심사 일자 : 2017. 10. 26. |
| 게재 확정 일자 : 2017. 10. 27. |

< 要 旨 >

『風葬の教室』に関する一考察
—山田詠美の求める人間像をめぐって—

洪珍熙

山田詠美(1959～)は現代日本文学を代表する女性文学者の一人で、その文学性と大衆性が同時に認められている作家である。1985年、『ベッドタイムアイズ』で文芸賞を受賞し文壇デビューを果たした彼女は、既存の文学作品には見られなかった女性主導の性愛を大胆な筆致で描写したことで、枠に囚われない恋愛小説を発表した。その一方で、山田は、10代の少年少女を主人公とするいわゆる「青春小説」を通じ、彼らの悩みと彼らが一人の人間として成長していく過程を描いてきた。

本研究で考察した『風葬の教室』(1988)も青春小説に属する作品で、小学五年生の「本宮杏」という少女を通して、教室という空間に充満する集団主義や、唯一の大人である教師に対する不信を示している。また、人間としてのモラルを失った共同体を獣の世界に喩えている。結局、作者山田がこの作品を通して求めていた人間像は、責任やモラルを持つ主体的な人間であったと言える。

特に『風葬の教室』は、現代日本文学において中心的な人物として扱われることが少なかった青少年、それも少女を、個性のある主体的な主人公として設定した点と、日本の公教育が抱えている問題を表面化させ、教育現場の現実を再考させたことにその意義があると思われる。

A study on the “*Fuso no kyositsu*”
—Focusing on the Human Figure Amy Yamada Asked for—

Hong, Jin-Hee

Amy Yamada(1959～) is one of the most representative female novelists in modern Japanese literature. In 1985, she made her debut in the literary world through “*Bedtime Eyes*”, a novel based on love between a Japanese woman and a black man. She presented an unconventional romance novel with female-led sexuality, which is rarely seen in existing literary works. On the other hand, Amy Yamada also wrote youth novels about the worries of teenagers and their transition into adulthood.

“*Fuso no Kyositsu*”(1988), which was analyzed in this paper, belongs to the category of youth novel. This work shows us collectivism inside the classroom and the disbelief of teachers by a fifth grade female student named “Motomiya An”, who is the main character. It also compares the community that lost its morality as a human being to the beast’s world. After all, the human figure which the author, Yamada requested through this work is an independent person with responsibility and morality.

Remarkably, it is noteworthy that “*Fuso no Kyositsu*” refers to a youth that is not treated as the main character in contemporary Japanese literature and the problems of an educational settings. Furthermore, it can be said that this novel has more significance, because it challenges young people as well as teachers to reconsider the reality of education.